さがしもの

土田耕平

青空文庫

文吉は、ある夏休の末のこと、親不知子不知の海岸に近い、従兄の家へあそびに行きました。

そして、毎日従兄と一緒に、浜へつれて行つてもらつて、漁夫たちの網をひくのを見たり、沖の方に、一ぱいにうかぶ帆舟を眺めたりしました。磯にうちよせてくる小波に、さぶ〳〵足を洗はせながら、素足で砂の上を歩くのは、わけてたのしいことでした。

二三日するうちに、文吉は、すつかり、海になれました。従兄につれてもらはなくとも、ひとりで浜へ出かけるやうになりました。

ある日のこと、朝御飯をたべると、すぐに、文吉は浜へ出かけて行きました。からりとよく晴れた日で、お日さまは、沖の方を、あかるくてらしてゐましたけれど、近く山を背負うた浜のあたりは、まだひや〳〵した蔭になつてゐました。

やがて、お日さまの光は、沖の方からだん〳〵岸へ近づいてきました。砂地一めん、パツとあかるくなりました。文吉は、いつさんに、そのあたたかい光の方へ駈けて行つて、岩の出鼻をまがつたとき、どんとぶつかつたものがありました。それは笈づるを背負うた、一人のおぢいさんでした。文吉もおぢいさんも、一しよに砂の上に、ころげました。そして起きあがるときには、文吉がおぢいさんに抱きおこされてゐました。

「ヤレ〳〵かんべんしてくれよ。わしは、今一しんに、さがしものをしてゐたのでのう。」

おぢいさんは、しはがれ声でいひながら、文吉のきものについた、砂をはらつてくれるのでした。文吉は、びつくりした顔つきで、おぢいさんのするままになつてゐました。

おぢいさんは、もはや六十あまりの年ごろで、額にふかい皺がきざまれて、目はおちくぼんでゐました。おぢいさんは、文吉の顔を見て、

「ウム、よいお子ぢや。」

といひました。そのまま、後をふりかへるでもなく、とぼ〳〵歩いて行きました。

お日さまは、山の上に高くのぼりました。砂地はぽか〳〵あたたかくなりました。文吉は岩のかげに寝そべつて、

「へんなお爺さんだな。一体何をさがしてゐたのかな。」

そんなことを考へてゐましたが、白帆のうかんだ、うつくしい海のながめは、すつかり、文吉の心をうばつてしまひました。

それから、一時間ばかりもたつたころでした。

文吉は、砂地の上に寝そべつたまま、むしんに、口笛を吹いてゐました。海は大そうしづかで、時たま、磯波がザザアーと、うちよせる音がきこえます。文吉は、じぶんの口笛の調子と、それに入りまじつてくる海の唄に、ぼんやりと、聞き入つてゐましたが、そのとき、なむあみだぶつ〳〵と、聞きおぼえのあるしはがれ声が、きこえました。文吉は、はねおきました。

もう遠く、行つてしまつたことゝ、おもつてゐた笈づるのおぢいさんが、また、やつてきたのでありました。

「どうも、心のこりでのう。もう一度さがしにひきかへしてきた。」

おぢいさんは云ひながら、何か一しんに、さがし出さうとするやうすで、前こごみに、そこらを歩きまはつてゐます。

「何をさがすの？」

文吉は、たづねました。

「親鸞さまの石ぢや。」
「しんらんさまの石？」
「ウム。親鸞さまの石ぢや。」
おぢいさんは、時々、砂地にころがつてゐる石ころをひろひあげて、ためつすかしつして見ては、ポンとなげすててしまひます。
「だめぢや、これもさうぢやない。」
文吉は、ふと、じぶんの足もとに、波にみがかれた、きれいな石ころが目にとまつたのをひろひあげて、
「これぢやないの。」
といひますと、おぢいさんは、
「ドレ〳〵。」と一目見て、首をふりました。
「イヤ、ちがふ。」
「しんらんさまつて何？」
文吉は、たづねました。
「親鸞さまは、むかしのお上人さまぢや、生仏さまぢや。」
おぢいさんは、前こごみにとぼ〳〵歩きながら、いひました。
「それが石をどうしたの。」
「親鸞さまが、ここをお通りになつた。たつといお方ぢやけど、かうして、わしのやうな遍路すがたでな。それが、おそろしく海の荒れた日で、親は子知らず、子は親知らずといふ難所ぢや、そら、あそこに見えるぢやろ。」
とおぢいさんは、崖が海に迫つたところを指ざして、
「あそこに見えるだろ、あの洞の中へお上人さまはお入りになつた。ところが、大きな波があとから〳〵寄せてきて、お出になることができない。七日七晩、洞の中でおすごしになつた。そのあひだ、お上人さまは、南無阿弥陀仏々々々々々々と、石ころを拾つては、一字々々おしるしになつた。七日七晩といへば、えらい数ぢやろとおもふが、それが、このわしの目には一つも見つからぬ。申しわけのないことぢやて。」
おぢいさんの目は、そのとき、涙ぐんでゐました。
「わしは、もう行くとせう。」
と力ないこゑで、
「ぼんち、おまへは、よい子ぢや。せいだして、さがすがよいぞ。」
かういつて、波うちぎはの細みちづたひに、また歩いて行くのでした。文吉は、ぼんやり見送つてゐました。その笈づる姿が、むかうの岬のはしにかくれるまで。
「ぼくは、あしたは家へかへるんだ。親鸞さまの石をさがさうたつて駄目だがな。」
さう考へると、たまらなく悲しくなりました。
その夕方、文吉は、親鸞さまの石のことを従兄にたづねますと、
「馬鹿だな。おまへ、そんなことほんとにしてゐるのか。」
と従兄は笑ひました。
「だつて、お遍路さんがさういつてゐたもの。」
「まだそんなことをいつてゐる。親鸞上人はいつの人だとおもふ。七百年もむかしの人だぜ。」
「だつてお遍路さんは、ほんきにさがしてゐたもの。」
「お遍路さんなんて、何も知らないさ。ぼくのいふことが、うそだとおもふなら、学校へ行つて、先生にきいてみな。」
文吉はうなづきました。文吉の学校の先生は、文吉の問に、何と答へて下さるでせうか。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「夕焼」古今書院
　　1932（昭和7）年5月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2011年7月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さがしもの

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/